
数学天使オイラーちゃん！

菊本寛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数学天使オイラーちゃん！

【Nコード】

N5899Q

【作者名】

菊本寛

【あらすじ】

くだらぬ人生を送った戦国アキラの元に数学天使オイラーちゃんが現れる。今度はヒルベルトと言う男の仔風の数学天使が落ちてくる。ヒルベルトを追って別の天使が落ちてくる。ヒルベルトがこの世とあの世の境界線をなくし、またそれによって世界が崩壊しようとしていることがわかる（第三のヒルベルトプログラム）。それを知ったオイラーとアキラとあと天使もるもるは一旦は諦めかけたものの、人生に対する後悔が捨てきれず、ヒルベルトと戦うことを決める。ヒルベルトと戦ううちにヒルベルトがアキラと同じような世

界に対する不満感（実は男の子になりたかった）を持っていることがわかるが、世界の崩壊は止めることが出来ず・・・となるが、天界の宝具を使うことによって、時空を元に戻すことに成功し、もう一度ヒルベルトと戦う前に戻って勝つ。が、その時空でもやはり装置を止めることができず、オイラーちゃんが犠牲になる。はずだったが。そこで実は最初からこの物語の主人公のアキラが死んでいたことがわかる。数学天使オイラーはアキラの努力に対するご褒美を与えていたのだ。あの感動を返してくれ。と言う落ち。

(前書き)

実質1日分くらいで書いてるけど、4、5日掛かったわ。
もう受験勉強するでゲソ。

まだ、読み返して無いからどうなってるか良くわからんでゲソ。

「だれだお前は！」

僕は突然の空から女の子が降ってくるという、「そんなまさか！」と100人中90人くらいはそう思うようなことではあったが、ゲームのことばかり考えていたからなのか、その時は空からというよりも、この少女が誰であるかと言うことの方が先決であるように思われた。

「あれあれ？ わたしはレオンハルルト・オイラー。数学天使だよっ！??？」

「ふーん……。いやいや。誰だよ。」

僕は驚いて少女の顔をもう一度見上げた。外国人のような薄い瞳、短めの金髪、目線を下げると服装は世界史の教科書で見た、いかにも中世のヨーロッパにいそうなそんな格好、そして腰には小さな体格に似合わない大きな剣をぶら下げている。

「ああ……。たぶんきつとかわいそうな人に違いない……。」

そう思っただけが彼女に悲愴な目を向けていると、彼女はそれに気付いたのか、僕の方を見て怒ったような顔をした。

「あれー？ おかしいな一応ちよつとは有名な数学者だったらしいのになあ。困ったなあ……。まあしかたないかっ！」

しかたないとは何様のつもりなのか！

そして僕の方を見て言うのだ。

「それじゃーわたし忙しいから、あんたはあっちに行って良いわよ。それじゃっ！」

なんだよ嫌なヤツ。

スタスタと踵を返しさっさと行くオイラーちゃんとやらを眺めて僕はそう思った。しかしそう、ここであのままヤツがどこかへ行ってしまえば、この物語はこれで終わりだったのだらうが、しかし現実にはそうはならなかった。何を思いついたのか、そのときオイラーちゃんはくりと何かを思い出したようにカムバックして、また僕の方へとツカツカ歩いてきたのだ。そして言った。

「あのー……。ところでどこってどこ！??？」

30分後。そのオイラーちゃんやらはなぜだか、僕の家へと（決して薦めたわけではない）のにあがりこみ、（薦めてないのに）僕の部屋に「ああ、ここがあんたの部屋ねっ！」と勝手に話を進めて行った。そして彼女によると、どうやら彼女は天国から来た「数学天使」であり、天国でのポテンシャルがどうたらこうたらの研究中に間違つて地上へと落ちてきて、彼女がエウクレイデスとかニユートンとか言う人と一緒に住んでいて、そして何より彼女があ有名な数学者レオンハルト・オイラーの生まれ変わりらしかった。これなんてラノベ設定？

「で、そのオイラーの生まれ変わりがどうしたって？」

オイラーちゃんは不機嫌そうに眉間にしわを寄せる。

「だからアキラは何を聞いていたの？」

何って。全部だよ……。いきなり良く分からん話を聞かされるこっちの身にもなつてくれ！

オイラーちゃんはそんなことおかまいなしで、一方的に僕に”お話”を続ける。お前はインデックスか何かなのか。

「私はオイラーの生まれ変わりじゃなくてレオンハルト・オイラー本人よ！ 良い？レオンハルト・オイラーみたいなものじゃなくて、レオンハルト・オイラーそのものがわたしの！良い？」

念押しに告ぐ念押しである。

「はいはい、でそのオイラーさんが僕になんのですか。いや、つて言うかオイラーと言う人は男だったと思うんだけど……。君は女みたいなの……。」「

「うん。そうだよ」

そう言われましても。

と、僕が困り果てていると。それに気付いたのかオイラーちゃんは腰にぶら下げた大きな剣をカツンカツンと鳴らして、ご機嫌そうに話し始める。

「中世つてのは現代みたいに、女性が平等に活躍する機会は与えら

れていないのだよ！ だから私のように実は美少女だったと言うような例がたくさーんあるわ！ 例えば私の家に住んでるフェルマーちゃんとかもそうねっ！」

な、なんだって！。フェルマーって言ったら、あのつい最近解けたことで有名なフェルマーの最終定理のあの人じゃないか……。フェルマーって女だったのか！！？

僕の動揺した様子に、オイラーちゃんはよほど嬉しかったのか、ニヤリと得意げな顔を浮かべる。

「フェルマーって女だったのか！！？？」

「そう。しかも私よりも美人でかわいいんだよっ！」

そうなのか。いや……。そうだったのか……。っ……。ということは……。ふっふう。どうやら世界は私の思っていた方角へと回り始めたようだな！

そして僕はもう一度、彼女の方を見上げた。良く見るとレオンハルト・オイラー、すっげーかわいい美少女じゃないか……。しかも欧米の血が流れているからなのか、とてつもなくスタイルがいい。

「しかし、オイラーちゃん。それは実にけしからんねえ。中世から来たんじゃない、きつと現代のことに驚いたり、いやそれはやはり物語の登場人物であるわけですから、それはきつと驚いたりなさるわけですよえ？ だから僕がこの現代を案内して差し上げますよ！
！……！」

ぶるつとオイラーちゃんは細かく震える。

「アキラ今何か変なことを考えなかった？ 男ってのはこれだから不潔だって言うのよね」

するどい！ なかなか手恐いね、オイラーちゃん！ 流石に世界の数学者だけのことはあるな！

「それとせつかくだけど、現代と言うのは天国よりもはるかに技術力の劣った場所よ。だからいちいちあなたがわたしに街を案内することはないわ」

えー。それじゃあ物語に良くある展開じゃないじゃないか。

「あ、でもやつぱり、ちよつとその辺見たいから、あんたちよつと案内してくれる」

どっちなんだよ。

オイラーちゃんはさつと立ち上がると僕の手を引いて、早くしろと僕をせかした。

だいたいなんだよオイラーちゃんって……なかなか面白いじゃないか。

「おいアキラ。これなんだ!？」

なにつて、そんなものを指してなにとはなんだ。いやいや、これはまさかこれを知らないなんてことは……。

真つ直ぐとその指の示すもの。

「自動販売機だけだ」

く。ぷ。ぷ。つ。とオイラーちゃんは堪えきれなかったようで、突然笑い出す。

「自動販売機。ひひひ自動販売機だつてよー、頭おかしいだろ」

全く自動販売機の何が面白いのか。僕には数学天使とか言うやつのほうがよつぽど面白く見えるんだが。

「まさかこれは児童販売機というくらいだから……、自動で飲み物を販売する機械なんだろうな!これは面白い!」

いやそこは全然面白くないんだけど……。

オイラーちゃんは抱腹して笑っている。

「おいそれからこれはなんだ?」

これつて、いやこれはこれだろ……。まさかこれを知らないなんてことはあり得ないだろう……。。

「マンホールだけだ」

「マンホール!……ぐふふうふふう。ひひひつマンホールだつてよ! 頭おかしすぎて腹が痛てえ!」

何がそんなにおかしいんだよ。つたく。

オイラーちゃんは腹を抱えて笑っている。そして一言こう言った。
「ぐふうふう。さあバカはほつといて帰るか？」

帰るか？ 何が帰るか？ っだよ。誰に言ってるんだよ。なんて酷いやつだ……。まったく天国の人間ってのはみんなこうなのか！
??

まったく美少女だから許されるようなものの、これがいい年こいたおっさんなら蹴飛ばすところだぜ。僕はそう思った。

一日が終われば人は家へと帰る。帰らぬというわけにはいかぬのだ。空から美少女が降ってくるなんて全く妄想怪しからん。家に帰る頃になって、はてさて一体どうするのかと思っていたが、どうもこうもオイラーちゃんはずうずうしくも行く先もないらしく、今日のところは僕の家までついてくる気らしかった。しかたないので僕は、半分キレかかっているオイラーちゃんを僕の部屋でおとなくしているように必死になって頼み込んで、とりあえず大人しくしているはずだった。そう、それでよかった。それで僕は物語上に置いて、美少女との同居と言う体のいい交遊を保つことができたのだから。それだけで良かったんだ。

ガチャリ。

僕が部屋のドアを開けると、僕の期待が、そうはならないことをその瞬間に悟った。

ボタン。

「おい、閉めるなよ」

明らかに誰もいないはずの部屋の中から声が聞こえる。いや、中に少女の姿くらいは見えたかもしれないが、そんなことは決してなかった。オイラーちゃんが僕の後ろで何か言おうとしている。

「いま、部屋の中から何か聞こえなかった？」

「いや、気のせいでしょう」

そう気のせいに違いない。これ以上やっかいなことに巻き込まれてたまるかい。

しかしその僕の期待は見事に裏切られることとなった。

「おい、いけないなら行くぞ」

そう言っ僕部屋の内側から誰かが部屋の扉を開けようとする。それはまずい！

僕はわけもわからず必死になつて、僕の部屋の扉を押さえつける。
「あれーおつかしいなあ。これはこうあける物だと思つたんだがなあ」

部屋の中から声がして、僕はもう泣きたくなくなつて部屋の扉を握り締める。

嘘だ！ 信じないぞっ！

そしてその次の瞬間。僕は生まれて初めてあの奇怪な現象を見た。
「しかたねーな」

そう言つて部屋の中にいた何者かが、部屋の壁を、まるでそこになにも存在していないかのように歩いて通り抜けたのだ。そしてその何者かは僕の目の前に立ちふさがつた。

「誰だお前！??」

お前が誰だ！

そこにいたのは、紛れもなく人の形をした、とても綺麗で儂い顔をした美少女だった。

「あつ。オイラーじゃないか」

そう言つてその小さなかわいい女の子はこれまた小さくてかわいいオイラーちゃんを指差した。身長は少しだけあつちの子の方が高
いかな・・・いや良く見ると・・・あれ・・・何かあつてはならぬ
ふくらみのような物があるような気がするが、まあ良いか 見な
かつたことにしよう。

「あつ。ヒルベルト！その髪型かわいいねっ！」

がくり。まてまて、髪型じゃなくてその前に、そのヒルベルトが
何でここに居るのが先だろうよ！ てーかお前等知り合いかよっ！

「アキラ。紹介するね！ 彼の名前はデイビット・ヒルベルト、元
数学者の数学天使だよ。主な業績は幾何の公理系の研究だよ。」

ヒルベルト空間や零点定理が有名だねっ！ でもなんでこんなところにいるんだ？」

遅いよ！ それ突っ込むの遅いよ。しかも先にさらっと流したところに、まさかとは思っけど「彼は」って入ってたよ。そっちをもっと強調するべきだよ！

「いやー奇遇だなあ」

呑気なやつめ！ なにが奇遇だっ！

その夜

「そっかー。ごめんね。気がつかなかった。天国ではその者の魂が天使であるか悪魔であるかは気にするけど、男か女かなんて気にしないからねっ」

そう言っつてオイラーちゃんは、綺麗な西洋服に身を包んだヒルベルトの方を指差した。

「まあいわゆる男の仔ってやつかな、体よく言えば」

物分り良すぎだろ！ 天使の癖に男の仔なんて良く知ってたな！
僕が呆れてものも言えずにいると、ヒルベルトはさっと立ち上がって服を脱ぎ始めた。

「こらこら勝手に服を脱ぐんじゃない。」

「じゃあ俺寝るからさ」

そこは僕のベッドだというんだ。何様だ。

「じゃあわたしも寝るわ！」

お前もかい。

ヒルベルトはきていた女物の服を脱ぎ捨て立ち上がると女みtainな下着をつけたまま、僕のベッドにもぐりこんだ。ああ、きつと誰かが見たら誤解するような光景だろうなあ。一方、オイラーちゃんは床の上で座布団を枕にしてぐーすかぴーと、こいつ良くこんなわけのわからん状況で寝れるな、と思うぐらいすぐに寝付いてしまった。

オイラーちゃんのおほかわい寝顔をじっと眺めながら、僕はあ

れこれと考え事をしていた。するとベッドの寝ていたヒルベルトが女みたいなか細い声でこう呟いた「第三のヒルベルトプログラム、もうスグ始まる。第三のヒルベルトプログラム。始まる、もうすぐむにゃむにゃ」

そのヒルベルトの寝言。それは大事件の始まりだった。

あれから1ヶ月がすぎた。あれから僕の人生は大きな変化があり、楽しい人生になりました。話終・・・。

あれから、僕は厳しい母親にこっぴどく叱られた。ネットばかりしてパソコンを弄ってどうのこうのともあつたが、どこの家のこだかわからない子は泊められるわけがないと言う、すげえ常識的な意見により、オイラーちゃんとヒルベルトはしぶしぶに僕の家から追い出されたのである。どうしてこうも日常と言うのは楽しい方向に転ばないものかね。と僕が呟いていると、隣にいたオイラーちゃんが僕に話しかけた。確かにオイラーちゃんは家を追い出されはしたものの、数学天使の隠された五四一の力とやらを使って、僕のそばにいるわけだった。そういえばヒルベルトははなから僕に興味などなかったようで、どこかに行った。まあ僕も男には興味がないし、この際、別に問題なかるう。その時はそう思った。

「今日は38アイスクリームに行きたいなあ」

「またかお前昨日も行ったろう」

そう確かに昨日もアイスに行った。オイラーちゃんはイオンのフードコートにフランチャイズされている、あの31のアイスクリームが大のお気に入りなののである。しかし、オイラーちゃんは31と言う数字が素数だから気に食わない。これは38にすべきとの理由から、いやあるいは19の二倍であるからと言う理由で、38アイスクリーム、38アイスクリームとバカの一つ覚えのように繰り返すのであった。ちなみにお気に入りは、なんか青くてはじけるヤツである。正直言うと財布がわりに上手く使われているの気もしなかったが、天使なんだからこいつ実は金を持つてるだろう、だ

から・・・恩返し、いや当然、10倍返し100倍返しなど期待したい。大切にしておけばそれだけの利益が僕の財布に転がり込むだろう、と言う邪推が僕を駆り立てた。僕は悪人ですかね。

「私は一円ももっていないよ」

僕は不自然のないように慎重に話題を切り出す。

「でも、天使なんだから、なんか人にはできないような、凄いことができたりするんじゃないか？」

「たいしたことはできないよ。でも・・・」

でも・・・なんだって言うんだ・・・？

「そうだった！」

オイラーちゃんは唐突に切り出した。

「そう。魔法を使えるようにしたあげようか」

・・・！！！！

待つてました！

「へえー魔法ねえ。天国だから、凄いだろうねー。どんなのが使えるのかなー」

僕はさりげなく魔法の中身を聞き出そうとした。

オイラーちゃんはえへんと僕の隣りで、アイスをほお張りながら、ペロリとコーンのギザギザを齧る。

「左手を前に構えてみて」

こうか？

僕はオイラーちゃんに言われたとおりに、左指に思いっきりちからを入れて、そのまま腕ごと前に突き出した。

「で、” Given by heaven and powers of the God distort all its reality”・・・。はい唱えて」

オイラーちゃんは真剣な表情で左手を向こう側に向けて魔法を唱える。

すぐ向こう側には店がある。日常的な僕の生活が溢れている。こんなところでこんな魔法なんて・・・使っちゃって良いのか・・・？

オイラーちゃんが光の中で叫ぶ。

「つたりめーだろ！」

「この魔法は自らの体内に蓄積された能力を解放つ力によってできているんだよ！ この光の強さと位相の大きさは・・・君の潜在能力は神々クラスかもしれない・・・大抵の人間はこの力をエロに使ってしまうんだ・・・」

オイラーちゃんは驚いたような顔をしている。

「なんだとエロをなめるなよおおおおお！！！！！！」

俺は叫んだ。

そして燃え尽きた。

疲れ果てた僕の肉体をオイラーちゃんは素通りして、僕の向こう側に置いてある財布を手に取り、31アイスクリームへと向かった。今日何個目だ。トリプルを12個くらいか。良く食うなあいつ。

とにかく僕はパワーを出し切ったらしく、疲れて何も喋る気にはならなかった。

ぼんやりと前方を眺める。向こうの方から、見るからに怪しい集団がこちらへと近づいてくるのが見えたような気がした。

「おやおや、ヒルベルトじゃなくて、こいつはなんでい！！？」

和服を着た怪しい男が喋った。他にもゾロゾロと後ろから怪しい面々が顔を現す。

「凄まじい瘴気に釣られてきてみれば、お前”天界の力”を使うとは、地上の人間じゃねーな」

隣りにいた危なそうな男が喋った。頭がクルクルしている。マッドサイエンティストみたいな風貌の男だ。

「しかし見るからの普通の人間デス」

一番でかい男が喋った。胸から筋肉があふれている。掴まれたら死にそう、と言つか凄く苦しそう。

「そう」

最後に端からひよこんとポニーテールのかわいい女の子が出てき

た。萌キャラか何かか。

しかし、僕は疲れていてどうにも動く気になれない。四人の怪しい集団は僕の目の前に立って、僕のことを観察し始めた。一番でかい筋肉男が、僕の首をぐつと掴む。

煮るなり焼くなり好きにしてくれ……。

そう僕が諦めかけたその瞬間だった。

「あれ？ お前からここでなにしてんの？」

幸せそうに一段と半分になったアイスを齧りながらオイラーちゃんがりひよこりと僕の隣りから現れた。

知り合い……なのか……。

「左から関孝和、ニュートン、エウクレイデス、フェルマー、だよ！」

一番左が、やたらと熱血そうな和服。

二番目が、髪の毛クルクルした、危なそうなマッドサイエンティスト風。

三番目に、一番でかい古代ギリシア風の服を着た筋肉の塊のような男。

そして最後に、物静かな読書家風の少女が並んでいた。とても大人しそうだ。本を与えたらずつと読んでいるんだろう。

「こいつらもなんか生まれ変わりなんだろう。まあ良く考えると。面白そうなやつらじゃないか」

「失礼なやつだな」

ニュートンとか言うクルクルが言った。たぶん凄い偉い人だ。

「まあ中々骨のあるやつと思うぜよ！ わしは関孝和でい。よろしく頼むぜよ！」

この和服は、ほおって置くとべらべらと機関銃のように喋っているようだ。どうやらかなりの熱血らしい。腰に下げた日本刀は銃刀法違反だと思う。その日本刀を掲げて、自慢をする。この剣はわしの祖先がかの関ヶ原の合戦で使っていた代物よ！ その名も名刀遮

那の剣。

「よろしくデス」

裸のギリシアは、やたらと白い歯をむき出しにして笑った。どうも一人だけむさくるしいが、どうやら人の良さそうな好漢かもしれない。こういうキャラって実際は強いけどすぐやられるんだよね。と思った。たぶん理由はあるんだろうけど。

「ピエール・ド・フェルマー」

少女が呟いた。いや、きつと呟いたのではない。これが彼女の最大音量と言っやつだろう。これは萌に違いない。間違いない。

「弁護士」

フェルマーちゃんはそう言って恥ずかしそうに顔をあげた。真っ赤に染まった顔で僕の顔をもじもじと見つめる。いいね・・・！悪くないね！

「活ませよ！」

クルクルの髪を掻きあげてニュートンが叫んだ。僕の部屋のコップががたりと音をたてて飛び跳ねる。

「ああ見えてニュートンは恥かしがり屋なんだよ。気難しそうに見えるけど実は悪い人じゃないんだ。家に猫を3匹飼ってるんだよ」
「オイラーちゃんが僕の耳元でこそこそと呟いた。

まあ人は見かけによらぬといいますがからなあ・・・。

「我々は世界を救う救世主だ」

突然、とんでもない言い出しやがった。

僕はちらりとフェルマーちゃんの方を窺った。するとフェルマーちゃんはぱちりとウインクして返してきた。かわいい！ その隣でエウクレイデスがふんふんと鼻息を鳴らしている。関孝和は自慢の遮那を手に、ニュートンの右手の指すホワイトボードの方を窺っている。

・・・どっから持って来たんだ、このホワイトボード。

「ヒルベルトは現世そのものを破壊しようとしている。この世とあの世の境界線を彼は消し去る気だ」

なんだこれ。

「この世とあの世、天国と地上は、虚数空間の始まる前からいわゆる関数と逆関数の形、関係を保って存在してきた。だが、その境界線をヒルベルトは破壊しようとしている。この世に混沌をもたらすのがヤツの目的だ。ヤツは現世に力オスを創出をする気だ」

「それは変態デス」

エウクレイデスが叫んだ。

「それを言うなら大変」

僕の隣りでフェルマーちゃんが呟いた。

ポニーテール。ほんとかわいいな……。

「準備はどうでい。行くぜよ！」

遮那の剣をきらりと光らせた関和孝が言った。

オイラーちゃんは何事もなかったかのように、こたつに入ってミカンを食べている。良くこんなに冷静でいられるものだと感心する。むしゃむしゃとミカンを頬張るオイラーちゃんは手持ち無沙汰の右手でテレビの電源ボタンを押した。すると、テレビの中からあのオカマ、いや男の仔ヒルベルトの声がするではないか！

「時は満ちた。百年にわたる我が研究の成果。御開帳なり。くう」

「くそっ……。遅かったか……」

ニュートンが悔しそうに机を叩いた。

「皆さん聞いてください。私はヒルベルト。この世の神にして、あの世の王となる男だよ！ ふふっ！」

「ふざけたやろうでい！」

関和孝が怒ったように言った。

「これから僕の言うことを良く聞くんだよ！ 大事なことだけど一回しか言わないからねっ」

もったいぶりやがって。

僕がミカンを手にとってパクパクしているオイラーちゃんの横からリモコンを奪って、チャンネルを変えた。日本放送、フジテレビ、NHK、TBS、東京テレビ、東京MX、千葉テレビ、テレ玉、テ

レビ神奈川。

どれをとつてもヒルベルト、ヒルベルト、ヒルベルト、みんな同じ顔がご丁寧にも違う角度から映されているだけである。なんと足元のカットまでありやがる。

「無駄さ、無駄！ 電波を頂いてるからね。こんな甘っちょろい電波の出し方じゃあ小学生にでもご開帳されちまうぜ！」

なんだと貴様。日本の技術力をなめるなよ！

「いいかい、あと一時間で、君達がいるこの地球、というかこの銀河、宇宙、その上の空間、全ての現世があの世界線の境界線となる。君達は生きながらにして死人となるわけだ。そして見るだろう、世界の混沌をな。永久に続く世界の端くれを。まあ……。もし世界の受ける無限に近いエネルギーの放射に耐えることが”できれば”の話だがな……。くう」

「ちくしょうヒルベルトめデス……」

エウクレイデスは落胆した様子で頭を抱えている。どうしようもなく絶望的と言う文字が頭をよぎっているのだろう。

しかめつらのニュートンが僕のすぐ傍に立っている。

「あと一時間だと……。世界を混沌、カオス状態に導くなんて、くそつ。やつめ最初からそれを見越して、我々の研究に参加していたということか……。我々のしたことが……」

「研究つてのは？」

「第二のヒルベルトプログラムデス」

「……。あの世とこの世は写像によって結ばれていた。我々数学者、基”数学天使”はその管理人だ。現世の人間が死んだ後、写像的な操作を行うことによつて我々は常世への入り口を開くことができた。そのインバースされた世界点を広げることが我々の研究だった。オイラーはその研究中に地上へと落下した。それを探しに行ったのがヒルベルト……。だが我々はヒルベルトの持ち出したあれに気がついた……」

ニュートンが髪をかきむしる。

「そうこれは第三のヒルベルトプログラム、もうスグ世界は終る。このくだらない世界は完全に混沌に突き落とされる。そこは永久ではない。完全なる死だ」

テレビの中のヒルベルトがにやにやと笑った。

「許さない」

フェルマーちゃんが呟いた。いや、呟きではない。最大音量である。

「くそっ！ヤツはどこにいるんではない！」

どこ？ 場所が分かれば解決する問題なのか？

僕はあるうことがヒルベルトが今どこにいるのか理解することが出来た。

「これフジテレビじゃないかな？」

「フジテレビ？ それはどこです？」

オイラーちゃんが首を傾げる。

「そのこの横にでつかい丸がついてるだろ？ 場所は知らないけど、確かにその形はフジテレビだと思うよ」

「場所なんかわかってても意味がないデス。一時間では何もすることができないデス」

エウクレイデスが世界の果てに存在するかのような声で言った。

「それだけじゃねえぜよ。何しろヤツは例のあれを持ち出したんでい……」

あれとはなにか。

僕はいてもたってもいらなくなつて。フェルマーちゃんの助言を仰いだ。

「アルキメデスの盾。非公理の剣。天界の宝具」

恥かしそうにフェルマーちゃんは呟いた。いや、これが最大音量である。

「あれは間違いなく天界最強の宝具デス」

完全に終わった……。と言う表情でがっちりしたエウクレイデスの肩ががくと落ちた。

つまり……。

「これで我々も終わりと言うわけさ。もちろん、通常の死とは別物さ。今までは死んでもあの世で永久に生き続けることができた……だけれども、ヒルベルトはあの世とこの世を含めた、世界全体を破壊しようとしている」

「つまりこれは完全なる死」

「世界の終わりを意味するぜよ……」

「38のアイスクリームをもっと食べておくべきだった」

「おい。じゃあ反省会しようぜ」

世界の終わりまでもう一度過去の自分を見返すのも乙なものじゃないか。そう、誰だって自分が死ぬ前には、きつと自分の今までの自分の人生を思い返すに違いない。それが良いものだったのか、悪いものだったのか、それがどんなものかはわからないが、でも少なくとも自分が歩んできた、この人生つてヤツを振り返ってみるのも悪いもんじゃないだろ？

普段は熱血の関孝和が重い腰をあげて、ぐつと前に出た。

「じゃあまずわしからぜよ……。源内がこないだ俺の酒を勝手に飲んだんでい。でもよく考えりゃあれくらいはくれてやってもらったぜよ。あんな下らないことで殴り合いの喧嘩をするなんてばかなことでい……」

源内……平賀源内かな……。

さつと筋肉が僕の前を通過する。

「私はクレオパトラと、アントニウスにファッションセンスをバカにされたデス。ディオゲネスにいたっては数学バカだのどうだのと悔しいデス。腹が立って腹が立って仕方がないデス。良く考えれば最後に気になるのはこういうことデス。私は心の狭い人間デス……」

エウクレイデスはそこまで言い終わると、腕を地に伏してそのまま動かなくなつた。

小さいことでいちいち卑屈なやつらだな。こいつらの人生は一体どうなってるんだ。

「私にも言わせてくださいです」

オイラーちゃんが一步前に出た。

「実は私は250年前に整形をしたの。最初は整形をすれば自分の中の何かが変わるんじゃないかと言う、そう言う気分だった。だけれども、一度、自分の顔を変えたら、自分が自分でなくなったように、気に食わなくて、とにかく自分が嫌いになった。だから・・・、だからかも知れ無いけど、もう一度人生があるなら、最初からかわいい顔で生まれたい・・・!!」

なんて欲張りなやつだ。全然こりてない気がするんだが。

僕がそう思つて、オイラーちゃんを見上げると、目にはウルウルと涙が溜まっていた。かわいこぶつてるとか言わないほうがいいんだろつな。きっと彼女は本当に泣いているのだ、そう思った。

「俺もいいいたい」

真つ赤な顔でニュートンが言った。

なんだこいつ酒でも飲んでるのか!?

「生前の俺には、エリザベスと言う大好きな女の子がいた。愛していると言つても過言ではない。しかし、私は彼女に声を掛ける勇氣すらなかった。あの時、もし私に僅か一ミリを踏み出す勇氣があれば、ただそれだけのことで私の人生は大きく変わっていただろう・・・」

まさかの恋愛がらみか・・・。人間心残りになるのはそう言うことなのかも知れないなあ。今度生まれ変わった時には参考にしようかな。

かわいいフェルマーちゃんも静かに前にでる。

「私の残した最終定理、解法を書いておけば良かった。つまらないことで意地を張つて、そのことで回りに迷惑を掛けた。私が悪かった」

かわいい! 何をやってもかわいいよフェルマーちゃん!

「それに、私はいつも心の中に仮面をつけていた。心の中で楽しいと思っただことも、嬉しいと思っただことも、悲しいと思っただことも、その仮面が全てを飲み込んだ」

「そこまで言うとなフェルマーちゃんは僕のほうに目配せした。ウルウルと僕の目に涙が溜まった。そうだよなあ。人間ってそう言うもんだよなあ。」

僕は人生において、何を後悔したんだろうか。やりたいことをやらなかったことか。うん。それもある。好きな女の子に告白しなかったことか。うん。それもある。友達にけちを働いたことか。いや、それは別に大したことではない気もする。それともあるいは、

「僕は、自分が何をしていたのかよくわからない。ただなんとなく生きてきた、それだけだ。もちろん、やりたいことがあればやったが、それが苦しいことならすぐに諦めた。苦しいのは嫌だから。本当にくだらぬ人生だった、そんな気がする」

そして僕は立ち上がった。

「どうやらこれは運命と言うやつらしいな。ここで終るようならそれはそれで終わりなんだろうが、それで終るようならそれは、もう楽しくないだろ？」

「そして楽しくないことはつまらぬだろ？　クソたれだろ？　くだらぬだろ？」

「僕はヒルベルトを倒す。倒せないとかじゃなくて、倒したいから倒すんだ。やりたいときにやらなきゃいけないことから逃げて、それでまた新しいことを始める。それが苦しくなったら、また違うことを始める。そんな人生にはもう真つぴらなんだ。それに良く見るヒルベルトは剣を持っていないじゃないか。なぜだろうね？」

「僕がそこまで言うとなワンワン泣いていたオイラーちゃんが立ち上がった。」

「ヤツのところへ行こう」

「それなら源内とエジソンがくれた温泉があるぜよ」

温泉……………。

「これはただの温泉じゃねえぜよ。その名も空飛ぶ温泉」
そんなばかな。

「さあ景気付けデス！」

エウクレイデスが皆の前に酒を用意した。僕だけ富士ミネラルウォーターだったんだが・・・。

エウクレイデスは僕にミネラルウォーター入りのコップを差し出す。僕の手はコップを一度すり抜けて、それでももう一度、そのコップをとろうとしたがやっぱり手が届かない。その光景を皆が眺めていた。

「さあ温泉に載るぜよ！ 皆の者、服を脱ぐぜよ！」

服を脱ぐだと。なんだそれは。まさか、これはサービスシーンなのか・・・!???

そう思った僕の目の前にエウクレイデスのちんこが僕の目の前に現れた。

「うーむ」

そう思った僕の横から、オイラーちゃんがずっばんと温泉の中へと飛び込んだ。

「ジャパニーズ温泉素晴らしいあるね！」

おまえ何人あるか！

フェルマーちゃんも着ていた服を脱ぎ捨て、かわいいポニーテールもぎゅっと結びなおすと、全裸で温泉へと足を踏み入れた。多少曲りなりな形ではあるが、これはある種のハーレムと思うこともでき、でき、できできる！・・・はずだ！

「ピンポンパンポーン。あと三十分で世界が崩壊します。皆さんご注意くださいー!!!? これで世界は完全に終わりです。世界は死を迎えます。空が青いのは今だけです。地球が青いのも今だけです」
甲高いヒルベルトの声がこだまする。

「さあ出発するデス」

「行くぜよー!!」

こうして僕達はヒルベルトのいるフジテレビ本社へと向かって行った。

なんだこれは。

「あと十分で世界が終る。これで世界が終る」

ヒルベルトは自らが開発した装置の前で、ケタケタと笑っていた。そうこれで世界が終る自分を見放した。この世界が終るのだ。この装置が稼動すれば、世界が理論どおりの完全な数学の元に置かれる。そのことが数学的に証明できる。そのことがヒルベルトを突き動かしした。

そのときだった。どこからともなく聞こえてくる。楽しそうな晚餐の音が。そしてその瞬間、目の前に巨大な温泉が現れる。温泉の乗り物と言うより空全体が温泉になっている。これは虹の温泉に違いない。

「覚悟しろヒルベルト」

僕は叫んだ。

「覚悟しろ」

僕の隣に立った、フェルマーちゃんが最大音量で呟いた。もちろん温泉に入る者は誰でもみな全裸であったが、男子の、いや、紳士のプライドとして決して横は見ないことにする。いや、本当はちょっとくらい覗いてみたかもしれない。見えたと言った方が良いかもしれない。

「なんだこれは？ お前等なぜ服を着ていない？」

「全裸であることが裸族たる我々の使命デス」

エウクレイデスが言った。いや、その説明はどうかと思うがな。

「きさま非公理系の剣をどこへやった？」

ちんこを隠したニユートン叫んだ。この期に及んでまだ隠すものがあるとも言つのか。

「お前らそのかっことどうにかしろ」

ヒルベルトが叫んだ。いや、全うな意見といえよう。

「紆余曲折があつたんでい、ヒルベルト。今日こそは我が遮那の剣の出番でい！」

ふんどし一丁の関孝和が叫んだ。こいつ自分だけふんどし用意してやがった。

「人生はそんなに甘いもんじゃない！ 服を着てれば良いってもんじゃないから！」

オイラーちゃんが怒ったように叫んだ。うんうんと僕はうなずいた。そう服を着れば良いつてのは人生の勝ち組の意見だね。あれっ？

「剣はここさ」

そう言つてヒルベルトはあのフジテレビの丸の奥底から巨大な剣を取り出した。

でかい……。なんてでかさだろう。

「さあこいよ。もう時間はないんだぜ？」

ヒルベルトのすぐ後ろにある、あの世界を破壊する装置を壊せば僕らの勝利だ。あれさえなんとかすれば、それは凄く簡単なことだと思えた。

その瞬間ヒルベルトの放った斬撃が僕のスグ横を掠める。僕の体に衝撃が走る。

「危ない！」

オイラーちゃんが大きな声で叫ぶ。

だがその瞬間、エウクレイデスは関孝和の遮那の剣を奪つて、ヒルベルトのスグ目の前まで切り込み、そして一瞬でヒルベルトの体を切り裂いた。

全てが終つた。そう思った。

「ふふう？」

ゆらりとヒルベルトの体が揺らめき、今度はエウクレイデスの巨大な体のほうが崩れ落ちた。良く見るとエウクレイデスの体に大きな剣が完全に突き刺さっている。

何が起こつたのかわからない。

攻撃を受け流すことじゃない。全ての波に干渉でき得ることなんだ。だから君の使ったポンコツは全くの無駄だったってわけさ」

「べらべらとうるさいやつでい！」

関孝和が遮那の剣でヒルベルトに切りかかった。遮那の剣はヒルベルトの盾に突き刺さる。

「もらった！」

後ろからオイラーちゃんが大剣をヒルベルト目指して突き立てる。その一撃は見事にヒルベルトの背中を貫く。

「可憐に舞え」

フェルマーちゃんがぼそつと呟く。フェルマーちゃんの手元から無数の花びらがあふれ出し。六本に別れて渦を巻いた。

「ときには蝶のように」

フェルマーちゃんがまた何か呟くと、その花びらはクルクルと綺麗に形を変えて、おおきな蝶のような形に変形した。

そしてその蝶から出る花びらが、ヒラヒラとヒルベルトの肢体に巻きつく。

「やった」

鮮やかな茜色に染まったその光景に、僕はつい中空に握りこぶしを作った。

これで、僕達の勝ちだ。これで世界が元通りになる。そう思った。「で、君は何をしているのかな？」

ヒルベルトの不気味な笑い声が、僕の耳にこだました。

「世界の崩壊まで後、1分と40秒。君は何もしなくて良いのかい？ それとも・・・」

周りを見渡すと、誰もいない。

「何をしているのかな？ 君の愉快的仲間達なら、ほらそこにいるよ？」

ヒルベルトの指差す先には、倒れたフェルマーちゃんの死体が転がっていた。

「ほづらそこにも」

そこにはエウクレイデスとオイラーちゃんの無残な死体が転がっていた。全裸だ。情けない死に様。

「言っただろう？ 非公理系の剣はすべての空間を破壊する、勿論、時空もその例外ではないのだよ」

ヒルベルトは笑いながら言った。

「さあ世界の終わりを一緒に見物しようじゃないか。あと一分20秒」

くそつ。もう僕にはどうすることもできない。やつは非公理系の剣、あれはまさに最強の剣に違いない……。しかしもう……。僕にはどうすることも……。

えっ……。！？

瞬間、僕の眼前に驚くべき光景が入ってくる。

「ぐすん」

ヒルベルトが泣いている。

ぐすりと濡れた目頭を隠すように腕で拭う。演技なんかじゃない。本当にヒルベルトが泣いている……。

「お前……」

「聞いてくれ……。私はな、本当は男に生まれたかったんだ……」

なんだと！

まさかの展開だな。

「だけでもそれは叶わぬ夢だった。私は男だと思った。そう思った。だけでも私にはあれがついていなかった。それは許されぬことだった。もうそう思ったら世界なんてどうでもよくなった、だからめちゃくちやにしてやろう。私をめちゃくちやにしたこの世界をめちゃくちやにしてやろう。そう思ったんだ」

そう言っただけヒルベルトはがっくりと首を垂れる。

そうか。

ヒルベルトはこの世界が嫌いだったんだ。だから、自分を認めない世界を自分ごと消し去ろうとしたってわけか。なんて酷いやつ。

いや、本当に酷いのは世界の方なのか？ 世界さえそれを認めれば
ヒルベルトはこんなことをしなかったって言うのか？

「僕は認めるよヒルベルト」

「嘘だ！ みんな表ではそう言うけど、結局、影でコソコソと私の
ことを馬鹿にするんだ！」

そう言うってヒルベルトは剣で空を切り地面を叩きつける。

「そうさ。そう言うこともあったさ。だけど誰でもみな自分の正し
いと思うことしか正しいとは認めない。結局、私のことなんてどう
だって良いんだ。私がどうなったて、そんなことは知らないんだ！
だから……」

ヒルベルトはブンブント剣をグリグリと地面に突きつける。

すぐわきでヒルベルトの機械が不気味な音を立て始めた。

くそっ……。

ゲームオーバーか……。もう時間がない……。

「そんなことない！ 僕はヒルベルトを見捨てないよ！ 人それぞ
れ色んな悩みがあつて、僕だってそう思ったことは何度もあつたさ
！（こそこそ悪口言われた時とか、小学生の時我慢できなくなつて
トイレでう　こした時にな！ それぐらいしか今は思いつかん！）
そうじゃないんだ！ だから、もう止めてくれ、ヒルベルト！」
僕はなりふり構わず叫ぶ。

ヒルベルトはがっくりとうな垂れている。

そしてゆっくり口を開く、頬を真っ赤に染めて、腕を精一杯握り
締めて。

「もう遅いよ……」

ヒルベルトは僕の方を顔を真っ赤にして見つめる。

「ありがとう。嬉しいよ……。でも、もう止まらないよ」

ヒルベルトはそう小さな声で震えるように言う。

目に涙をいっぱいにして。

もうどうにもならない、でも僕はなんだかとても嬉しく思う。僕
の気持ちヒルベルトに伝わった。それだけが嬉しい。

だから。

この世界を。

「終らせてたまるかよ!!」

あのヒルベルトの機械がやばそうな音をたてている。

もうあと数秒でヤツはこの世界は終らせてしまっ。

「ごめんね」

そう言っつてヒルベルトは動かなくなる。

いや、まだだ。まだ終つてねえ。

「Given by heaven and powers of
the God distort all its reality!!」

僕は必死になつてオイラーちゃんから教わつた”魔法”を思い出
す。

もうこれしかない・・・。

これで駄目なら、もう僕にできることはなにも残っていない。

「極小の希望と封印された神々の力を創造せよ! 復活せよ俺の怒
れる黄金の左腕レフトハンド! エターナル!! フォース!! ブリザード!!!

!!!!!!!!!!!!!!」

僕は必死になつて呪文を詠唱する。

僕の左腕から光が眩い放たれ始める。

「アキラ・・・」

ヒルベルトが叫んだ声がかすかに聞こえた気がした。

ヒルベルトの後ろにあつた装置が暗黒と共に爆発し、ヒルベルト
の体を、世界を飲み込んでいく。

遅かった。

もう駄目だ。

しかし、僕はあきらめなかつた。

そう、もしかしたら、僕の魔法が駄目でも、ヒルベルトのあの剣
で時空を変えれば、この世界は助かるのではないか。そう思ったか
らだ。

「うおおああおおおおおおおおおおおおおおお おおお
！」
光に包まれた僕の体は、何とか世界の終焉に立ち向かうことが出
来る。

あとはあの剣に掛けるしかない。

僕の目の前で、ヒルベルトの体が消えていく。ヒルベルトは最後
に僕の方を見つめて悲しそうに何かを呟いた。

そして。

その言葉を言い終える前に、ヒルベルトの体は完全に消失した。

「くそおおおおおおおおおおおがああああああああ
世界はくそや。おかしなことだらけや。何一つ僕のことを聞き入
れてはくれはしない。だがなあ。だが、

そして俺はヒルベルトの体から落ちた非公理系の剣を掴み取った。
俺の体が段々と永久の闇に吞まれていく。

さあ、これで終わりや。

終わりにしようか。

天界の剣よ。

全ての時間を、時を。

すべて元通りにせよ！

剣はギョルギョルと俺を飲み込んで行く。

これで……、これで全てが終る……。

そうこれで……。これでよかつたんだ。

天界の剣は優しい光で僕の体を呑み込んで行った。

僕達の願いをかなえ、

全てを元通りにするために……。

Another Ending

あのあと僕は非公理系の剣との契約により、神とであった。神と
言うのは世界の全てを作りしものに決まっている。やたらとフラン
クナ神はそう僕に言った。だが、そうして未来は変わったmのだ。

「覚悟するんでいヒルベルト」

関孝和が温泉の上に乗った神輿の上で叫んだ。

「覚悟しろヒルベルト」

僕も負けじと神輿の下から叫んだ。

僕の隣りには白いビキニを着たフェルマーちゃんが立っていた。

「覚悟しろ」

かわいいよフェルマーちゃん！ この水着にして正解だったな！
最大音量で呟くフェルマーちゃんをチラリと見て僕はそう思った。
「男の正装はふんどしと相場が決まっているデス」

エウクレイデスが叫んだ。 18禁になるのは嫌だからな。

「きさま非公理系の剣をどこにやった！」

ニュートンが叫んだ。

「ここぞ」

ヒルベルトはゆらりと腰から剣を引き抜く。

「僕の出番のようだな」

僕もヒルベルトと同じように、腰から”非公理系の剣”を引き抜いた。

「な・・・なぜ”お前も”非公理系の剣を持っているのだ・・・？」

「こ、この剣は、この世に二本と存在することを許されぬ神の剣の

筈・・・」

ヒルベルトは”慌てて”自分の剣に目を落とす。

そう、それも紛れもなく本物の非公理系の剣。

だが、この僕の持っている剣も、紛れもなく本物の非公理系の剣に違いない。

「非公理系の剣は二本存在しない、それは、それ自身の力が矛盾を引き起こすからだ！ そして今、この二本の非公理系の剣には”以前”のような強力な力は残されていない！」

「な・・・なんだと」

瞬間、関孝和の遮那の剣が、ヒルベルトのすぐ横をかすめる。

ヒルベルトは吃驚して僕の方を見つめている。

ヒルベルトの頬から汗が一筋流れ落ちる。

「もらった！」

「うぐう・・・」

低い悲鳴と共に、オイラーちゃんの大剣がヒルベルトの体を貫く。

「可憐に舞え」

フェルマーちゃんの蝶がヒルベルトの体を宙へと浮かびあげる。

「これで終わりデス」

エウクレイデスがヒルベルトの体を剣で叩き付けた。

すかさず俺がヒルベルトに最後の一撃を加える。

「ぐふうふうかはあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ヒルベルトは既に虫の息である。

「ヒルベルト」

僕はヒルベルトに近寄った。

「ヒルベルトのやりたかったことはもうわかったよ。ヒルベルトは本物の男の子になりたかったんだろう？ ほらちゃんとここにヒルベルト用の浴衣を用意しておいたよ」

そう言っ僕は用意していた男物の浴衣をヒルベルトに差し出した。

「さあ僕達と一緒に温泉に入ろう！」

ヒルベルトの目から涙が零れ落ちる。

「そんな・・・。みんな私のことを分かっていたってこと・・・？ 全部私の勘違いだったの・・・？ それなのに、それなのに、私みんなに酷いことをしてしまった・・・」

「そんなことないよ！ 今からやり直せば良いじゃないか」

「うん・・・でも・・・」

さあ後は、あの装置を破壊すれば終わりだ。

僕は非公理系の剣を振りかざし、装置に向かって真っ直ぐと振り下ろした・・・。

カチン・・・。

剣が跳ね返る音が虚しく空に反響した。

「えっ・・・？」

僕の手から汗がだらだらと流れ落ちる。

「もう、その装置を止めることはできないの」
「ヒルベルトは泣きじゃくりながら叫んだ。

「そ、そんなー！　なんてことぜよ！」
関孝和が頭を抱える。

「くそっ！」

ニュートンが悔しそうに舌を打った。

「もう終わりデス！」

とエウクレイデスは大きく吼えた。

「まずい」

胸の前でタオルを押さえて、フェルマーちゃんが呟いた。

くそっ。こんなところで終わったしまうなんて・・・。

だが、オイラーちゃんだけは違っていた。

「仕方ないわね」

そう言っただけでオイラーちゃんはヒルベルトの非公理系の剣を拾い上げた。

そしてコツンコツンと時の止まったビルに足音を響かせた。

「私の計算ではこうなるんじゃないかって思っていたわ」

オイラーちゃんは僕の目の前で手を開いた。どうやら、僕の持っている剣を渡せと言っているらしい。

「私の名前を言っただけで見なさい！」

オイラーちゃんはそう叫んだ。

「レオンハルト・オイラー」

僕の腕から剣がだらりとぶら下がる。

「もう一度！」

オイラーちゃんの目に涙が見える。

「レオンハルト・オイラー」

そんなのってあるかよ。

「もう一回！」

「レオンハルト・オイラー！」

「まだまだ」

「レオンハルト・オイラー！ オイラー！ オイラー！ オイラー！ オイラー！」

僕は狂ったように叫ぶ。

「そうよ私の名は数学天使オイラー！」

オイラーちゃんは僕の手から優しく剣を奪い取った。
そして。

あの装置へと近づいていく。

「まさか！」

ニュートンが叫んだ。

「オイラーはきつとあの剣で装置を消す気デス！」
エウクレイデスが叫んだ。

「犠牲」

「そんなの嫌だ！ 折角助かったと思ったのに……。一緒に過ごした楽しい日々はどうなるっていうんだよ！ オイラーちゃんー！ー！ー！ん！！！」

「みんな離れるんだ」

ニュートンが僕の肩を叩いた。

「じゃあね。みんな」

オイラーちゃんは笑って手を振った。

目には大粒の涙が溜まっている。

ちくしょう。

なんてことだ。

こうしてオイラーちゃんは異次元へと、僕達の世界から消えて行った……。

はずだった。

そう感動の最終回である。

「おう。お前なんでここにいるんだよ」

「さあ」

僕はピンクの水着できゃぴきゃぴ温泉につかっているオイラーちゃん
の肩をつかんだ。

「なかよしデス」

エウクレイデスがヒルベルトの隣りでカラオケを歌っている。カ
ラオケって日本の文化だったらしいな。

「王手ぜよ」

僕達が入っている温泉の横で、関孝和とニュートンが将棋を打っ
ている。

「ふう」

僕の向かい側にいるフェルマーちゃんが、水着姿で溜息をついた。
彼女だけが僕のわびさびだった。

「・・・もう気付いているんでしょう？」

唐突にオイラーちゃんは呟いた。

真っ直ぐと前を向いたまま。

「・・・ああ・・・まあなんとなくな」

僕も真っ直ぐとオイラーちゃんと同じ方向を向いていた。

「じゃあ言うけど・・・驚かないで聞いてくれる？」

「ああ」

僕は生返事をした。

「アキラは最初から死んでいたのよ」

そんなこと突然言われたら誰だって驚くわ。

僕の腕はわなわなと震えていた。今までの僕の感じて違和感、疑
念。

これで全てのピースが埋った。

「あなた随分努力家だったようね。努力家で、勤勉で、そのうえ童
貞でしかも仮性包茎。これで間違いないかしら」

「そんなことまで公表してくれるな、半分は僕の悪口じゃないか」

僕はオイラーちゃんを睨みつけた。

「まあまあそう怒らないでよ。君が努力家であったことに対してこ

うして楽しい舞台、物語が用意されたわけじゃない」

あの感動を返してくれと言いたい。

「まあ一応」

とオイラーちゃんは先を続けた。

「あそこに階段があるでしょう。あれを上るとあなた天国に行くんだけど。あなたには選ぶ権利があるけど、どうする？ まあ仮に行かなかったとしても私が無理やり連れて行くけどね」

つまり、強制じゃねえか！

確かにハーレムのようなものには入れたがな。

世界の王にはなれてないじゃないか。

「それってわたしとフェルマーでは不満があるってこと？」

くそっ……。こいつ心の中を読めるのか……。

「ないわよね」

そう言っただけでオイラーちゃんはぷふーと温泉に鼻まで潜った。

ああ。一体なんなんだろうな。

「アキラ、私の名前を言ってみなさい」

突然オイラーちゃんが言った。

ああ。もう終るのかな。

「レオンハルト・オイラー」

そして僕は付け加えた。

「またの名を”数学天使オイラー”」

「おk」

そう言っただけでオイラーちゃんは手でおおきなバツを作った。

「えっ？ これで終わり？」

(後書き)

読み返した。

終わりが気に食わないけど、これはこのままですっておこづかなと言っことで、なおさないことにしました。

マンホールのあたりくだりは伏線にしようと思って忘れて残りました。でもこれも、なおさないことにしました。

他にもあるけど、まあ数日で書いたものであまり惜しくもないので、なおすなら、小説読んで技術をとってくるか、次、書こうという発想だ。でゲソ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899q/>

数学天使オイラーちゃん！

2011年2月4日22時55分発行